

獵犬

森岡 正作

富士に雪

ほつほつと喃語のやうに枇杷咲けり
朝市の白息太き投げことば
獵犬の耳から尾まで正しけり
極月の柱に搔かす背の痒み
数へ日の数へ切れざるもの抱へ
残党とおぼしき輩年忘れ
富士にまづ二礼二拍手大旦

句会の選句時に登四郎先生の近くに座っていて、時々先生の独り言を聞くことがあった。「また、富士か」という感じである。先生にしてみれば、今まで何十万、否それ以上の人が富士を詠んでいる筈で、駄句が多く普通の句であれば、そんな中に埋没してしまうということであろう。確かに先生にも富士を詠んだ句は少ない。そんな中で「富士に雪二三条ふえ七五三」という御句が句集『民話』にあった。前書きに「十一月十五日富士市俳句大会に招かれて」とあるので、ある意味で詠まざるを得なかつたのかも知れない。そういうことであっても、天気の良い日は一年中富士が見える私にとっては挑戦的にならざるを得ない。お蔭で「冬麗の富士に箒目あることし」は先生にも褒められ、「大根を抜くたび富士と目が遇ひぬ」はどこかの歳時記に載せていただいた。今朝の富士山は昨日より雪化粧が少し濃いようである。